

# 薬草園の花だより

第16号

2019年(平成31年)3月10日発行

## ■第16号に寄せて

あのおそろしい東日本大震災から丸8年の月日がたとうとしています。かなりの場所にては、道路や建物、鉄道などの復興は進んでるといわれる一方、遅々として表復興の進まないところもあります。また、見かけの復興は進んでも、家族や親戚、友人知人を亡くしてしまった人々などの心の復興はまだまだ手つかずと言わざるを得ません。一生癒えるものではないでしょうが……。命は助かっても家や思い出の品々を失った方々もたくさんいらっしゃる。今日にいたっても行方不明者が2500人以上ということの異常さと非情さ。

2011年3月11日、私はたまたま自宅のある仙台に帰省していてあの未曾有の災害に合いました。おかげさまで自宅は壊の一部がこわれた程度で無事であり、電気やガスは止まったものの、ありがたいことに水道が使えたので、被害はの大災害にしては軽微であったというべきでしょう。ただ、あのときに(贅沢かもしれません)暖かい飲み物や食べ物、新鮮な野菜が少しの間、手に入らなかったことにはまいりました。



スイセン

2日後、近所の奥さんが小さなボンベ付きのガスコンロを貸してくださいって暖かいお茶を飲んだとき、本当に一息ついた気がいたしました。その後、これに懲りて、カセットボンベによるコンロを仙台の自宅に常備することにしています。また、隣の名取市の郊外に住んでいる家の親戚が「野菜あるから取りにきて」といってくださいました。車で訪ねると、庭の隅の地面にキャベツの表側の葉をたくさん捨ててあるのを見て、思わず駆け寄って拾いそうになりました。ヒトの体が新鮮な野菜をほしがっている状況を身を以て体験した瞬間でした。おかげさまでゴミの葉を拾う必要はなく、新鮮な野菜を沢山いただきて帰途に着きました。

あのとき、何かもっと他の方々の役にたてることはなかったかと思うこと多々ですが、ヒトが地球46億年の歴史の中でなんとか生きている存在であることや自己保存の本能がまずは第一なのかなと思はれる経験もありました。

大震災による津波のヘドロをかぶった住宅地にその後スイセンが芽を出して花を付けたというTVニュースが流れました。スイセンは植え付けの場所や時期を間違わなければ実に栽培しやすい植物のひとつで、ある園芸書にはスイセンの栽培法として、「秋に日当りのよい場所に穴を掘って球根を適当に埋めれば、あとは何もする必要なし」と書いてあるとか。スイセンはヒガンバナ科の植物で、葉や球根にはリコリンなどのヒガンバナ科アルカロイドが含まれています。そのため、スイセンの葉をニラと間違えたり、その球根をタマネギと間違えたりして中毒を起こすことがあります。

タマネギとスイセンの球根を間違えることなどなかろうと思っていたのですが、シャンソン歌手でエッセイストとしても有名だった石井好子さん(1922~2010)が、朝日新聞のエッセイ欄に、間違えてスイセンの球根入りチャーハンを作ってしまい、大騒ぎになったことがあるということを書いておられるのを思い出しました。(船山)

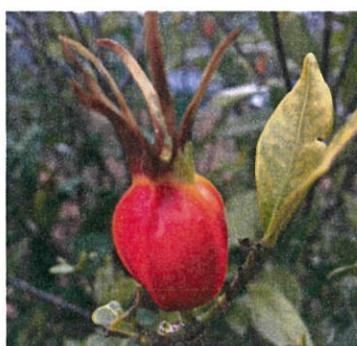
## ■今咲いています・見頃です

### 《クチナシの果実》

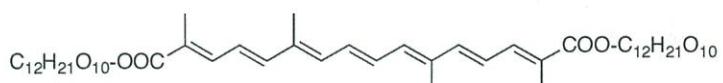
薬用植物園温室西棟の北側の外でコリンクチナシの果実が見られます。美しい朱色をしており、このものが染色に使われたこともうなずけます。

クチナシ(山梔子)は濃い黄色の色素を持っています。この色素のことから、ふと、元号が昭和から平成となり、新天皇(今上陛下のこと)の即位にともない、今の皇太子殿下が皇太子となられたとき、皇太子しか着用できないという黄丹袍(おうにのほう)を着用されたのを思い出します。黄丹袍はクチナシの果実の色素とベニバナ(紅花)の色素にて染められたものだとか。

クチナシの黄色の色素の正体はクロシンですが、面白いことに、この色素はサフランの雌蕊からも得られます。サフランの雌蕊を口に入れると唾が真黄色となり、この色はなかなか消えません。



コリンクチナシの果実



クロシン

### 《アオキ》

植木職人さん達には「困ったときのアオキだのみ」という言葉があるそうで、アオキは洋風でも和風でも庭のどこにでも合うのだとか。アオキは美しい赤い実もつけるのですが、とくに斑入りのアオキはその葉だけでも十分に鑑賞に耐える植物です。のみならず、我が国ではアオキの葉は「百草」や「陀羅尼助」「練り熊」などと称される民間薬にも配合されています。この植物の葉は、いわゆる押し花とすると真黒となってしまうことでも知られていますが、上記の薬を作る際、キハダ（黄柏）を煮出したものにアオキの葉を加えて煮詰めるとつやのある真黒な状態になるとのこと。



アオキ

アオキは江戸時代にプラントハンターと呼ばれる人たちにより日本からヨーロッパに持ち込まれました。寒さにも日陰にも強いことから大人気になりましたが、最初に渡欧したのは雌木だけ（アオキは雌雄異株）だったので、結実してあの魅力的な果実を鑑賞することができませんでした。このため、幕末近くに来日したプラントハンターのロバート・フォーチュンの目的のひとつは日本からアオキの雄木をイギリスにもたらすことでした。彼はこの目的を無事に果たし、それ以降、ヨーロッパのアオキも結実するようになったのです。

なお、フォーチュンには邦訳されている『江戸と北京』（廣川書店）という著書があります。この中で、彼は「江戸ではどんな小路に入っても植物を植えた鉢が見られ、この国の人々が植物を愛する国民であることが印象的であるが、このようなことは北京では見られない」ということを述べています。

## ■最近の他の植物写真から（7）

今キャンパス内あるいは周辺にて最近撮影した植物写真から、いくつか選び出してみました。外はまだ寒い日もありますが、室内では様々な花も咲いています。今年も東京ドームにて「世界らん展」が開催されました。その会場でついで購入してしまったセッコクが机上で花をつけてくれました。キャンパス内ではウメが開花中です。桜の季節もまもなくですね。セッコクもウメもナンテンも薬用にされます。セッコクは石斛、ウメは烏梅、ナンテンは南天などとして。



世界らん展にて  
(東京ドーム)



セッコク（品種名：白雪）



ウメ（昭和薬科大学）



ナンテンの果実（仙台市）

## ■薬用植物園からのお知らせ

### 《春を待つ園場》

この時期は多くの植物にとって休眠の時期。薬用植物園の園場では土に腐葉土などの有機質をすき込んだりして、春への準備です。なんとなく寂しげですが、どっこいあちこちの土の中では春からの活動にそなえて種々の植物が動きだしているはずです。これからどんどん芽を出し花を付けはじめます。どんなドラマを見せて貰えますことでしょうか。新年度の薬用植物園もどうぞよろしく。



春を待つ日本薬科大学薬用植物園の圃場

発行：日本薬科大学薬用植物園管理運営委員会  
 委員長（薬用植物園長）／船山信次  
 副委員長／山路誠一  
 委員（教員）／野口博司・西川由浩  
 新井一郎・糸数七重  
 委員（事務）／今村隆・中野雄太・鈴鹿和子  
 土屋翔太郎・佐藤智恵・黒木重夫  
 オブザーバー／野本有香（薬用植物園）